様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３３８０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２３６５

研究課題名（和文）英・米･モーリシャス文学にみるチャゴス難民の表象と実態

研究課題名（英文）Representation and Reality of Chagossians in Literary Texts

研究代表者
小池　理恵（KOIKE, Rie）

常葉大学・外国語学部・准教授

研究者番号：８０３２９５７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、チャゴス難民を扱った文学作品（モーリシャス・英・米）を分析し、その表象が難民たちの苦悩と実態をどのような手法でどこまで表現手法ているか、手法そして読者にどのように理解されているかを調査するものである。換言するならば、米軍基地の存在により起きている諸問題に文学が果たしうる役割である。
　チャゴス諸島は英米よりその地政学的な利点に注目され、独立時にモーリシャスより切り離され英領と名称まで変えられた上で住民を段階的に強制移住させた後、米軍基地を建設するためにアメリカに貸与され現在に至っている。帰島後にも起こるであろう問題を見据え、沖縄文学による米軍基地問題の表象を比較対象として分析提示した。

研究成果の概要（英文）：This research has investigated mainly two literary texts related to the Chagos and representing the Chagossian refugees: "Mutiny" by Lindsey Collen a female Mauritian writer, and "a lesser dependency" by Peter Benson, a male British writer.With a comparative reading of Okinawan Literature, in which victims of the-US-base-related circumstances are represented.
 The origin of the Chagossians had been wiped out; their homeland was renamed the British Indian Ocean Territory and is still under the US occupation. As Creole-speaking, Christian islanders born in the Chagos, the only identity markers that Chagossians may share with Okinawans are the plight of the refugees from Mauritius and Japan respectively. However, as fighters who do not give up hope, it is important for the Mauritians as well as Chagossians to understand Okinawan struggles through the literary texts; physical displacement in the novels and trauma associated with occupation in those of Okinawa have been discussed.

研究分野：アジア系アメリカ文学・モーリシャス地域研究

キーワード：チャゴス難民　モーリシャス　米軍基地　ディエゴガルシア　沖縄文学

１．研究開始当初の背景

インド洋上のアフリカ圏に位置する島嶼国モーリシャス共和国は、1968 年英国より独立後、多民族・多言語国家として比類ないほど内政的にも外交的にも安定しているかのように捉えられてきた。しかし、インド出身のアメリカ人作家 Bharati Mukherjee は 1980 年代の小説にモーリシャス出身の名もなき不幸なインド系女性を主人公と同じ密航船に乗せるかたちで登場させている。アメリカ人作家として Mukerjee はいくつかの作品にモーリシャス、またはモーリシャス人を登場させている。申請者はその理由を探ってきた。その途上で実はアメリカとモーリシャスには、地政学上、重要な関係があることがわかった。モーリシャス周辺地域は歴史上地政学的に重要な拠点であることから列強が軍事的経済的価値を見出し利用してきた。独立時に包括領であったチャゴス諸島を切り離し英領とした上でディエゴ・ガルシア島は米軍に貸与されたまま貸与期間を延長し今日に至っている。こうした領土問題・政治的背景は、アジア特に日本ではあまり語られてこなかった。一方で経済的には、ノーベル経済学賞を受賞し、近年来日し日本経済に関する提言も行った Stingliz 教授は、2011 年に「モーリシャスの奇跡」と題するエッセイを寄せるほど注目している。また世界経済フォーラムによる評価においても 2013 年アフリカ圏で第一位となっている。

申請者はこれまでの科研費研究によりモーリシャスの「独自の文学の可能性」「言語政策」「チャゴス難民問題」に取り組んできたが、本研究では、文学が政治的社会的な問題をどのように表象することが効果的であるのかというところに着眼した。アメリカの作家 Mark Twain、ノーベル文学賞作家 Le Clezio やインドの作家 Vikram Seth ら文学者が注目してきた国、そのモーリシャスが今も抱えている領土問題、チャゴス難民問題を直接的間接的に取り上げている作品に注目し文学の持つ力でできることを模索することが本研究の背景にある。

２．研究の目的

英米の軍事目的の犠牲となり、モーリシャス独立前に強制移住させられたチャゴス難民問題を表象する文学作品を収集しそれらの比較研究を第一の目的とする。従って日本をはじめ多くの国々に「チャゴス難民の現状を知る文学」作品群（ジャンル）として形成することを目指す。特に直接の関係各国（英国・米国・モーリシャス）からの作品における難民問題に対する姿勢・描き方の共通点と相違点を作品の解釈・作家のアプローチから読み解き、読者の解釈にどのような影響がみられるのかを分析する。最終的には、日本における米軍基地問題を表象する沖縄文学との比較を試みる。

３．研究の方法

関係３か国の文学作品を通してチャゴス難民問題の現状を作者はどのように伝えようとしているかを把握するために、１）各作品の精読、２）作家へのインタヴュー調査を実施したうえで、読者がそれらをどのように読解しているかを把握するため、３）チャゴス難民の現状を実地調査、４）チャゴス難民のことをよく知るモーリシャス人との読書会、４）国際学会で発信し意見交換を実施する。更に継続的にグローバル規模での調査を行うことを前提に、５）当初予定のテクスト以外の作品情報を収集し、「米軍基地（難民）文学」として展開すべく準備する。

４．研究成果

（1）本研究の最大の成果は、期間中６回の国際学会での発表を通し、チャゴス難民問題の存在自体をいまだ知りえなかった多くの学者たちに周知することができたことである。特にハンガリー・ペーチ大学で開催のアフリカ学会では、米国の大学に勤めている学者からのフィードバックを得られた。彼はディエゴ・ガルシア島の米軍の存在そのものがチャゴス難民を生んでいる現状を知らなかったとのことである。また、韓国外国語大学主催のアフリカ学会では３回の発表を通し、そこで出会った学者たちが別の学会の情報を共有下さるなど、モーリシャス、チャゴス難民問題に注目していただける結果となった。そして、２０１８年独立５０周年を迎えるモーリシャスではその前年モーリシャス大学において国際学会が開催され、モーリシャスのこれからを討論する場で、本研究に関する報告ができた。従って「チャゴス難民」を扱う文学に関する研究というこれまで日本では勿論国際的にも事例のないテーマを扱ったこと自体に大きな成果があった。

（2）具体的には、モーリシャス・英国・米国の作家によるチャゴス難民の表象をその作品の中に見出し、読者にどのように伝えられるのかを検証した。まずモーリシャスであるが、チャゴス難民の主たる移住先であり、帰島に向けての運動の拠点であるチャゴス難民センターの代表である Olivier Bancoult 氏が居住している。モーリシャスの女性作家 Lindsey Collen の *Mutiny* を中心に分析した。Collen は南アフリカ出身のモーリシャス人作家・活動家でもある。彼女自身が難民たちの運動を長年サポートしていることから、最も効果的にその状況を作品に描くことができると考えたからである。*Mutiny* は今回対象としている他の作品とは異なりチャゴス難民のみを主人公にしているわけではない。３人の女性囚人の牢獄での様子を描いた作品である。一つの特徴的表象といえるのは各セクションの冒頭に憲法をはじめ関連条例や規定などを提示していることである。そしてこの表象においてチャゴス難民との関連で

重要な点は、モーリシャス国憲法では、その領土にチャゴス諸島を含んでいることである。以下は小説からの引用であるが、それは実際の憲法からの引用でもある：

> *Definition of the state of Mauritius*: Mauritius includes-(a) the Islands of Mauritius, Rodrigues, Agalega, Tromelin, Gargados Carajos and the Chagos Archipelago, including Diego Garcia. [*Constitution of Mauritius Act (1968) (Section 111, as amended for Republic status in 1991)*]-Copied down in the Prison's Library (Mutiny 97).

３人の女性囚人のうち一人がチャゴス難民である。彼女は殺人罪で投獄されているが、実際には殺人を犯していない。彼女は自分の子供が貧困生活の中死んでいくのを止めることができなかった。子供のために何一つできなかったことに罪の意識を感じている。その心的状況を短い台詞で淡々と描いている。チャゴス難民の女性たちにインタヴュー調査を実施したが、彼女たちは感情をあらわにはせず淡々と当時の様子を語っていた。まさに Collen の描き方と重なっている。Collen の描き方・立ち位置で注目すべき点は、チャゴス難民をモーリシャス人として描いていることである。端的に言えばチャゴス難民問題を「われわれの問題」つまりモーリシャスの問題として捉えている点であるといえる。また、チャゴス難民の「女性」を主人公の一人にすることは、実際の帰島に向けての運動がチャゴス難民の女性たちのハンガーストライキから始まったことと深く関連付けられる。しかしながらその運動を始めた難民第一世代の女性たち（母たち）は高齢化しその多くが他界している。彼女たちの声なき声を絞りだすように表象している作品である。

（3）英国の作家 Peter Benson の Encore Award受賞作である *a lesser dependency*は、チャゴス難民たちの苦悩を描いた世界で初めてのフィクション的記録であるといわれている。1964 年、Ilois（チャゴシアンを指すクレオール）一家４人が文明とはかけ離れた、しかし平穏な島での生活を送る様子から物語は始まる。すぐに彼らの運命が急展開する様子を描いている。戦略的に英米に操作されてきたチャゴス諸島住民の排除の様子を家族の視点から描いている。まず物資供給の船が来なくなり、所用でモーリシャスに行くと帰りの船を出さないなど、ついには全員が強制移住させられることになる。最終目的地のモーリシャスに移動させられる途中の寄港地セイシェルでは現地の牢獄が彼らの宿舎であったことなど、史実に基づいて描かれている。（申請者が実施したチャゴス難民たちの多くが同様の内容を語っている。）このハイペースの展開は読者に難民たちの運命がいかに彼らの意思とはかけ離れたところでコントロールされ操作されたかを印象付けるための手法である。その史実に沿いながらも難民の一家族の運命に翻弄される様子、苦闘を当時 10 歳の Leonard が絶望して亡くなるまでを通して描いている。Collen の作品とは異なり作品全体がチャゴス難民の家族を中心とした物語となっている。この点がインサイダーとしての Collen にはない視点である。つまり「彼らの問題」として全体像を描くことに主眼をおいているといえる。Veronique が言うところのノスタルジックな過去の再構築は、難民たちにチャゴス諸島との文化的歴史的つながりを強化させるものとなるだろう。しかし、チャゴス難民たち自身がこの小説を読む可能性は極めて低い。特に第一世代、第二世代の難民たちは英語の識字率が低いからである。本作品のモーリシャス人の見解は「チャゴス難民たちの島での生活がモーリシャスでの生活と乖離していることが理解できる」というものだった。

（4）一方で米軍基地文学といったときに、沖縄文学も当然視野に入れるべきであると思い至り、本研究期間中に、目取真俊の『希望』と吉田スヱ子の『嘉間良心中』を取り上げている。米軍基地が存在することで起きた事件や苦悩をどう描くか、女性の抵抗の姿をどう描くかという視点で比較検証の対象として導入した。これは研究者自身が日本人であること、チャゴス難民たちが帰島した際に直面すると想定される基地との共存・共生の弊害を提示することにもなるからだ。特にチャゴス難民センターの代表者であり国際司法の場で中心的に争っている Bancoult 氏は米国の社会学者 David Vine 氏とともに Dialogue Under Occupation という国際会議に参加のため沖縄を訪問している。彼の目に映った沖縄県民の抵抗は「一体感が感じられない」（本人談）というものだった。

（5）最後にモーリシャス生まれのアメリカ人による *Coma Story* を当初テクストに想定していた。作者とのメールインタヴューを含む事前調査を行った。しかし、以下の２つの理由により他の２作品のような分析には至らなかった：1.作者自身が作家ではないこと、2.従って文学作品として読みづらいこと。実際にモーリシャス人とのプレ読書会の中で、この作品を文学作品として取り上げることは難しいという結論に至った。モーリシャス人によるコメントを例示する：

> One point that I do not agree is the happy ending of the story. Though the author has s broad imagination and twisted things in all directions, which has made the readers think it is not real.

（6）国際学会での発表に対する重要なコメント及び読書会での意見を例示する：

> This study is attempting to discuss important characteristics of Lindsey

Collen's *Mutiny* by interpreting the political situation in Mauritius.
The study is believed to have broadened the research horizon of African literature in the aspect that it dealt with the work of a Mauritian writer which has not been studied in the meantime. Moreover, even though the study seems to give an impression of dealing with somewhat trivial issues, it is useful in that it reminded the history and society of Mauritius based on these issues.

（7）また国際学会で発表の際、新たなテクスト・作家の発見もあった。Ananda Devi（モーリシャス生まれフランス人作家）による *Eve out of Her Ruins,* Natasha Soobramanien (ロンドン生まれ)が現在 Diego Garcia に関する小説を執筆中であること。チャゴス難民問題が周知されるにつれ、新たな作品が発表されていくことが想定される。そして最終的にはハッピーエンディング、つまりチャゴス難民たちが彼らの土地を取り戻し、ある世代は生まれ故郷へ、次世代たちは先祖の土地へ帰るストーリーが書かれることが本研究を継続していく重要な意義であり役割でもあると考える。今後は「米軍基地の文学」はどこにあるか？つまり、チャゴスを追われ、モーリシャスにわたった後、その難民状態を耐え続けた人々にとって、チャゴス帰島は積年の夢ではあったが、その夢の実現が可能になってからの選択が必ずしもチャゴスに回帰する方向へと収束していくことはないとの仮定も含めて聴き取りそれを再話する作品群を収集する方法を探る。また地理的には米軍基地の存在が引き起こしてきた、そして現在進行中の様々な問題・事件・「難民」状態を沖縄・済州島・グアム・チャゴスの太平洋からインド洋海域に求め、グローバルな視点での拡大継続を目指す。

＜引用文献＞
Yongkyu Chang ed. DAHAE, R.KOIKE, "Seeing Chagossians in a British novel and a Mauritian Novel: A Comparative Reading of *a lesser dependency* and *Mutiny* "*Contemporary African Societies and Cultures,* 2017, 225－270.
KOIKE Rie、Race Wars in CELL: a Reading of Lindsey Collen's *Mutiny*、*Asian Journal of African Studies*、Vol.39、2016 年、pp.35－49.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
① KOIKE Rie、Race Wars in CELL: a Reading of Lindsey Collen's *Mutiny*、*Asian Journal of African Studies*、査読有、Vol.39、2016 年、pp.35－49.

〔学会発表〕（計 6 件）
① KOIKE Rie、The Role of Combating Voiceless Women in Literature: Asia (Okinawa) and Africa (Chagos)、The Rise of Asia in Global History and Perspective、2018.

② KOIKE Rie、Sharing their/Our Fates/Fights: the Outer islands of Mauritius and Japan、Mauritius After 50 Years of Independence Charting the Way Forward、2017.

③ KOIKE Rie、Refugees from "Base Nation": a Case Study of Chagos and Okinawa、International Union of Anthropological and Ethnological Science、2017.

④ KOIKE Rie、The Rise of Asia: Impacts, Risks, and Opportunities for Africa, (or Vice Versa)、The Rise of Asia、2017.

⑤ KOIKE Rie、Seeing Chagossians in a British Novel: A Reading of *a lesser dependency*、The 6th IAS Humanities Korea International Conference、2016.

⑥ KOIKE Rie、A Chagos Refugee represented in Lindsey Collen's *Mutiny*、Global African Studies、2016.

〔図書〕（計 1 件）
Yongkyu Chang ed. DAHAE, R.KOIKE, "Seeing Chagossians in a British novel and a Mauritian Novel: A Comparative Reading of *a lesser dependency* and *Mutiny* "*Contemporary African Societies and Cultures,* 2017, 225－270.

〔その他〕
KOIKE Rie、Viva, Multi-story-ism、韓国招待講演、2016.

６．研究組織
(1)研究代表者
小池　理恵（KOIKE Rie）
常葉大学・外国語学部・准教授
研究者番号：15K02365

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：
(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：
(4)研究協力者
（　　）